

透明感のある建築

経験的認識による空間膨張

指導教員 吉松秀樹教授 印

6AEB2219 佐長 秀一

1.- アキバでの透明感 -

透明感のある秋葉原に魅力を感じる。看板によって建築内部の様相は隠されているが、その看板によって内部が想像することができるため、意識的に立面の壁は薄く感じられた。不透明だが透明であるように見えたのはなぜだろうか (fig.1)(fig.2)。



fig.1 透明感のある秋葉原

fig.2 くすんでいる日本橋

2.- 認識上のズレ -

秋葉原で感じた透明感とは、透明でない不透明のものが透明であるように感じ、実際とは反対のことが生じていることである。

自己認識の中で起きている関係性に着目する。都市や建築を見るときに体験、経験したことの知識でその先の起こりうることを想像している。認識上にズレを起こすことで、人と人との距離や人と都市との距離が揺らぎ、自己認識の中に透明感が生まれ始める (fig.3)。

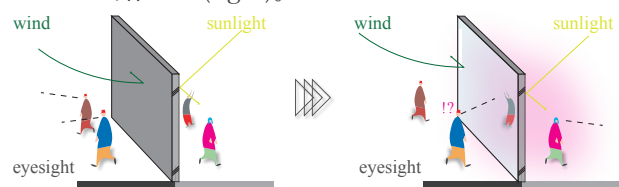


fig.3 認識上のズレによって生まれる透明感

3.- 壁厚の知覚 -

建物の壁厚は開口部を見ることで認識する。開口部によって壁厚を認識し隣室との距離を知る、自分を囲む壁厚は均一と経験的に判断される (fig.4)。

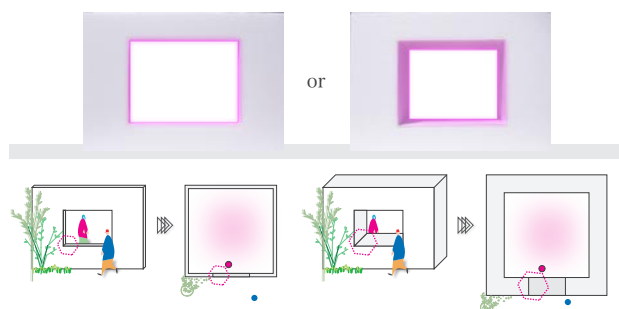


fig.4 壁厚の認識

4.- 経験的認識による透明感 -

通常、壁は隣室との間に様な厚さで存在する。その壁厚を不均一にすることで今までとは違う厚さ、距離が存在しているが、通常通り均一と認識してしまうことで、実際の距離とは異なった距離感が存在し、壁体、空間に透明感が生まれる。(fig.5)。

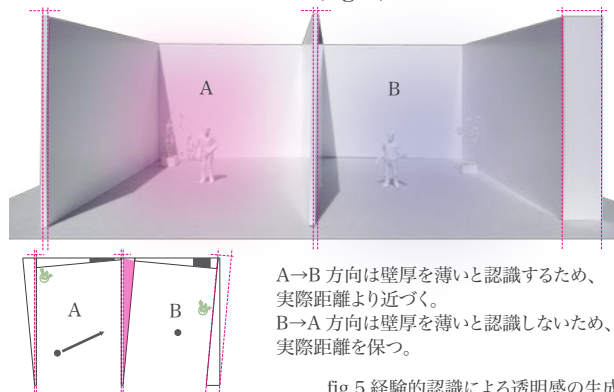


fig.5 経験的認識による透明感の生成

5.- 透明感のある建築 -

認識上にズレを与えることで透明感が生まれ、実際の空間との距離とは関係なくその空間同士が前後に揺れ動き、溢れ出しているように感じ取ることが出来る (fig.6)(fig.7)。

透明感のある建築は不透明な空間が連続しているが状況に応じて変化し揺れ動くため、様々な機能が同時に存在させることが可能である。ひとそれぞれの空間認識によって、空間の表情が変化することで、多様な空間体験をすることが出来る (fig.8)。



fig.6 透明感によって現れる隣室



fig.7 住宅 model



fig.8 透明感のある建築